

# 図書館だより

BUNKA GAKUEN LIBRARY

文化学園大学・文化ファッション大学院大学・文化服装学院・文化外国语専門学校  
東京都渋谷区代々木3-22-1 TEL.03-3299-2395 FAX.03-3299-2604

No.174

文化学園図書館

2022年4月5日発行

## きこうほん 稀観本解題 『北斎漫画』

### 『カンティク・デ・カンティクについての ジョルジュ・バルビエによる17のデッサン』(和訳タイトル)

図書館では、普段は手に取ることができない貴重な資料(稀観本)も所蔵しています。

本号では、そんな稀観本のなかから、浮世絵師・葛飾北斎の『北斎漫画』と  
フランスの挿絵画家ジョルジュ・バルビエの挿絵本をご紹介します。

#### 『北斎漫画』

岡島奈音 文化学園大学 准教授(美術史担当)

江戸後期の浮世絵師・葛飾北斎(1760~1849)の代表作と言えば、人気のあまり最終的には全四十六景になってしまった『富嶽三十六景』を思い浮かべる方も多いだろう。しかし、ヨーロッパにおける北斎人気の火付け役となったのは実はこちらの『北斎漫画』(西田W/721.8/K)\*である。というのも従来、フランスの銅版画家フェリックス・ブラックモンが日本製の輸出用陶磁器の梱包材として詰め込まれていた本書に目を留めた時こそ、西洋美術界が浮世絵を発見した瞬間であり、ジャポニスムはそこから始まったとされてきた。現在この逸話はあまりにでき過ぎと見做されてはいるものの、西欧で「ホクサイ・スケッチ」の名で親しまれてきた本書は、紛うことなき北斎の代表作なのである。

本書は十五編からなり、各編約60頁。B5サイズ(25.7×18.2cm)とほぼ同じ、およそ25×17cm

の冊子に3900余りの図が掲載されている。初編の下絵が描かれたのは北斎が53歳となった1812年、そして十五編が出たのは彼の死から30年近く経った1878年だから、実に66年という長きに亘って刊行されたことになる。『ガラスの仮面』が連載開始から46年、『ゴルゴ13』に至っては54年なのだから、漫画の長期連載は珍しいことではない…と思われるかもしれないが、ここで使われている“漫画”とは、コマ割りやセリフを伴う今日的なそれではない。当時“漫画”という言葉は「漫るに描く」、すなわち心の赴くままに筆を走らせるという意味の動詞として使われていたので、『北斎漫画』は直訳すれば「北斎が心の赴くままに描いた絵」という意味になる。

本書は絵手本と呼ばれるジャンルに属す。いわゆるカット集のようなもので、弟子は師匠に描いてもらつた絵手本を模写することで研鑽を積み、絵師として独

立した際は貯まった絵手本がネタ帳になった。初編の下絵を描いた当時の北斎は、読本挿絵の人気絵師として全国に二百人近くの門弟があり、彼らの求めに応じるのも一苦労だったに違いない。また彼の挿絵を陶器などの図案に（当時は著作権という概念がなかったので当然、無断で）転用する職人も多く、需要は明白だった。そんな北斎が名古屋に住む門弟の一人・牧墨僧（まき ぼくそう）に逗留した際に同地の版元・永楽屋のオファーで生まれたのが『北斎漫画』なのである。神仙に故事、仕事、暮らし、動植物、山や海などいかにも実用性の高そうな絵柄が並んだ初編の売れ行きが好調だったことから、全一編の予定はすぐさま全十編へと変更された。版元は完結後さらに予定を変更し、全二十編を目指したが、十五編目の下絵が揃わぬうちに北斎が没した為、図の不足分を名古屋の絵師・織田杏斎（おだ だきょうさい）が補って刊行された。

全十五編の内、本館が所蔵するのは三編（1815年）・十編（1829年）・十二編（1834年）の三冊である。収録された図は、例えば三編なら四天王や須弥山といった仏教主題、稻作の情景、相撲、踊り、鉱山の情景、中国の神仙、異国の人々、遠近法の説明、略画、王朝主題、景物、風神雷神、魑魅魍魎（ちみ もうりょう）、紋様、動植物、鍾馗（しょうき）、宝尽くしなどで、なるほど相撲や動植物



図1：『北斎漫画 三編』廿三丁裏（部分）

の図は、読者が自らのイメージに近いものを引き写して使うのにぴったりであろう。しかし諦め顔で膝を抱えた河童（図1）など、いかなる需要を想定しているのか皆目見当がつかないモチーフも少なくない。おそらく編を重ねるに連れて北斎の興味は絵手本としての実用性から離れ、まさしく心の赴くままに森羅万象を描き出すことへと向かったのであろう。

他とは事情の異なる十五編を除けば、どの編にも北斎の類まれなる発想力と描写力が横溢している。しか

し全編を通して、十二編の緊張感と伸びやかさを併せ持つ細い描線（図2）には瞠目せざるを得ない。例えば、十編は刊行当時、最終編として描かれたせいか、ネタ切れしき感もあり、北斎のトレイドマークでもあるチリチリと震える描線が絵をくどい印象にしていることは否めない（図3）。ところが、十二編にはこうした作画の緩みが感じられない。その一因と目されるのが、『北斎漫画』全編中



図2：『北斎漫画 十二編』十三丁裏・十四丁表

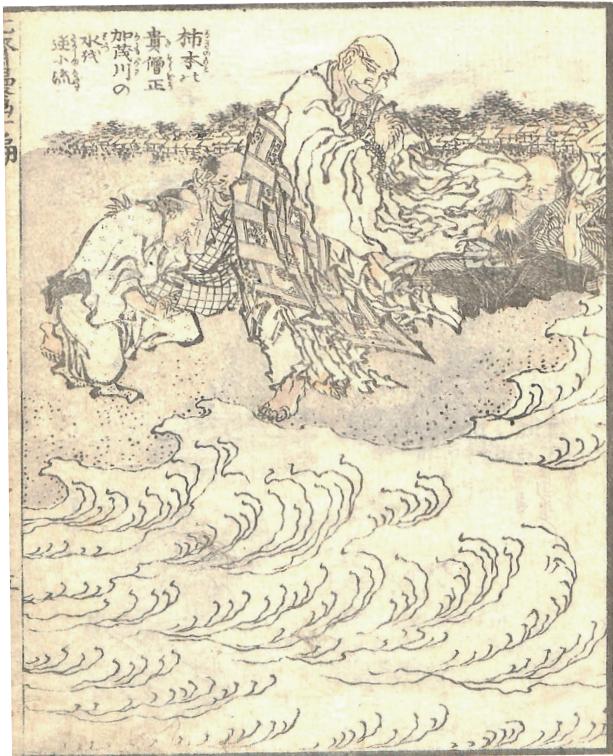


図3：『北斎漫画 十編』五丁表  
柿本の貴僧正賀茂川の水を逆に流の図

十二編にのみ彫師としてその名が記された江川留吉<sup>とめきち</sup>なのである。

江川留吉は、浅草・馬道の聖蔵院寺内に住み、1821～36年に北斎や歌川国貞の版木を彫った、江戸後期の彫師である。なお、木版浮世絵は絵師・彫師・摺師の協業だが、ほとんどの絵師が作品に銘を入れるのとは対照的に、彫師は顔を担当する親方レベルになるまで銘を入れることは出来ず、摺師に至っては個人名が出来ることはないので、彫師・留吉について明らかなことは上記以外ほとんどない。ただ、飯島虚心による伝記『葛飾北斎伝(上)』(1893年)には、北斎が留吉に言及した1835年の江戸の版元宛の書簡が掲載されている。曰く、『北斎漫画』や『唐詩選画本』の彫りは上々だが、親方が担う頭彫りにも弟子の胴彫りにも、自分の意図とは異なる箇所があった、一方『富嶽百景』全三編はどの丁にも版下絵の線や点の見落としが見つからなかった、ということである。『北斎漫画』十三編は1849年刊行なので、書簡で言及しているのは十二編までということになる。本書初編から十一編には彫師の名は記されていないが、十二編との技量の違いは明らかである。そして富士を様々な視点から描

いた絵本『富嶽百景』は、十二編と同じ年に刊行された晩年の大作で、これを彫ったのが留吉であった。

絵師だけで完結する肉筆浮世絵とは異なり、木版浮世絵の出来は彫師・摺師の腕に多分に左右される。あまりに細密な下絵に彫師が音を上げ、連作が途中で出版中止になったこともある北斎にとって、自らの一点一画を過たず表現できる彫師は得難い存在だったに違いない。先述の書簡で北斎は、他の彫師が下絵を無視して流行の歌川風に彫った『唐詩選画本』挿絵の鼻の穴や下瞼の表現を修正するよう求めたうえで、「後生ですから、老い先短い老人を救うと思って」と冗談めかしつつ、自作の彫りに必ず留吉を使ってくれるよう頼み込んでいる。留吉は神絵師・北斎が惚れこんだ彫師というわけなのである。

北斎の代表作である『北斎漫画』は普及版や質の高い復刻版が何度も出版され、本館にもいくつかが所蔵されている。しかし絵に生涯をささげ、最晩年は「絵に狂った老人」という意味で画狂老人と号した北斎が専属指名した彫師・江川留吉の線の切れ味は、ドットで表現する現在の印刷物では十分に再現できているとは言い難い。「後生ですから」ぜひとも実物をご覧いただきたいのである。

### 岡島 奈音

文化学園大学 准教授  
東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。

東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻美術史学修士課程修了。

修士(美術史学)。

#### 【専門分野】

日本美術史

#### 【研究テーマ】

百鬼夜行図の江戸末期から明治期における図像的展開  
【著書】

『河鍋暁斎 暁斎百鬼画譜』(共著)筑摩書房(2009)

#### 【論文】

「衣裳文様から見る河鍋暁斎筆「地獄太夫図」」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』第50集(2019)

“Decorative Dandyism in Japanese Men’s Kimono Design” IFFT2018 Conference Proceedings(2018)  
ほか



# 『カンティク・デ・カンティクについての ジョルジュ・バルビエによる17のデッサン』

Dix-sept dessins de George Barbier sur le Cantique des Cantiques : traduction française de 1316

Paris : Belle édition , 1914 printing

1 v., [17] leaves of plates : col. ill. (stencil) ; 24cm

菅野 ももこ 文化学園服飾博物館 学芸員

## 本書の概要

『カンティク・デ・カンティクについてのジョルジュ・バルビエによる17のデッサン』と題された本書は、1914年にパリの出版社「ラ・ベル・エディション」(La Belle Edition) から240部の限定で発行された挿絵本である(KB032/726.5/B)。挿絵を手掛けたジョルジュ・バルビエ(George Barbier, 1882-1932)は、アール・デコを代表するイラストレーターであり、本書は、彼の挿絵本の作品としては、ごく初期のものといえる。

「カンティク・デ・カンティク」とは、旧約聖書におさめられた「ソロモンの雅歌」を意味し、そこでは古代ヘブライの王であるソロモン(在位前 961~922)の統治下における、男女の愛と身体への賛美がおおらかに表現されている。本書の「ソロモンの雅歌」は、1316年のフランス語訳で、全8章からなり、その歌の総数は117に及ぶ。タイトルに記されている「17のデッサン」の内訳は、次の通りである。表紙:1点、口絵:2点、第1章:3点、第2章:2点、第3章:1点、第4章:1点、第5章:3点、第6章:1点、第7章:1点、第8章:2点。いずれも「ポショワール Pochoir(仏)」と呼ばれる版画の技法を用い、黒と金の対比によって古代の愛の情景が描き出されている。掲出の図版は、第7章の歌に寄せて描かれたイラストである。以下にその歌を記す。

「気高いおとめよ  
サンダルをはいたあなたの足は美しい。  
ふっくらとしたももは  
たくみの手に磨かれた彫り物。」  
(日本聖書協会『聖書：新共同訳』(1987年) より引用)



妖艶な女性の表情や青海波模様を思わせる波打つ髪とその大胆な構図には、世紀末のイギリスで花開いたオーブリー・ビアズリー(Aubrey Vincent Beardsley, 1872-1898)の美意識が見受けられる。また、細い枝に咲く梅の花や丸い手鏡、そして何より黒と金という配色は、日本趣味を想起させる。古代イスラエルをテーマにしながら、いつの時代ともどこの国ともわからない描写は、幻想的な世界を描くことを得意としたバルビエならではの表現といえる。

## バルビエについて

バルビエは、1882年にフランスのブルターニュ地方のナントに生まれ、裕福なブルジョワ家庭で教育を受けた。画家を志し、1902年にナントの美術学校へ進むと、同地の版画コレクターであるアルフォンス・ロツ・ブリッソノーに見いだされ、彼の庇護のもと、

徐々にイラストレーターとしての頭角を現していく。1908年にパリのアカデミー・ジュリアンに入学し、画家のジャン=ポール・ローランス (Jean Paul Laurens, 1838-1921) に師事する。バルビエは、当時の他の若いアーティストと同様に、アングロマニー（英國趣味）への憧れから、ビアズリーやウォルター・クレイン (Walter Crane, 1845-1915) といったイラストレーターへの関心を高めた。

特に本書には『イエロー・ブック』や『サヴォイ』、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の小説の挿絵画家として人気を博した、ビアズリーの作風に傾倒していた様子がうかがえる。ビアズリーへの憧れからだろうか、1905年から1908年の間、バルビエはロンドンに滞在していたことが知られている。バルビエが渡英した当時、すでにビアズリーはこの世になかったが、彼の作品はロンドンの街の至る所で目にすることことができたであろうし、その中で世紀末ロンドンのデカダンスを感じていたのではないだろうか。バルビエが本格的に挿絵を描き始めたのはちょうどこの頃からである。

ロンドンを後にし、パリへ渡ったバルビエは、ジョルジュ・ルパッペ (Georges Lepape, 1887-1971)、シャルル・マルタン (Charles Martin, 1884-1934)、アンドレ・エドゥアル・マルティ (André Edouard Marty, 1882-1974) といった「アール・デコ」を代表する挿絵画家とともに、数多くの雑誌や書籍の挿絵を手がけた。アール・デコとは、1920年代のヨーロッパやアメリカで流行した装飾様式で、建築や工芸、そしてファッショニに及ぶ幅広い分野に波及した。バルビエが手がけた代表的な作品には、『ジユルナル・デ・ダーム・エ・デ・モード』 (Journal des Dames et des Modes, 1912-1914)、『ガゼット・デュ・ボン・トン』 (Gazette du Bon Ton, 1912-1925)、『モード・エ・マニエル・ドージュルデュイ』 (Modes et manières d'aujourd'hui, 1912-1923)、『ラ・ギルランド』 (La guirlande, 1919-1921) といった、当時の「ポショワール4大誌」と称されるファッショニ誌が挙げられる。

## 版画技法について

本書を含め、当時の雑誌等の挿絵には、仏語で「ポショワール」、英語では「ステンシル」と呼ばれる、日本の浮世絵から想を得て発展した版画技法が取り入れられていた。この技法は、不透明な水彩絵の具を、亜鉛板や銅板のイラストの部分を切り抜いて作られた型の上から刷って着色する。これは、ヨーロッパに古くから存在する版画の手法をもとにし、当時、フランスの版画職人であるジャン・ソーデが日本の型染めや浮世絵の技法などの研究結果を含めて改良を重ねたことで、この時期特有の技法として昇華され、広く普及するに至った。彼の功績は、1925年にパリで出版された『ポショワール技法の彩色論 (Traité de l'enluminure à la pochoir)』 (KB035/737/S) にまとめられている。平面的でむらのない彩色、そしてアール・デコのポショワールの最大の特徴である、はっきりとした輪郭線と鮮やかな色彩表現は、たちまち人々の関心を集めることとなった。

バルビエは、アール・デコが花開いた20世紀初頭、パリを中心に活躍し、当時発展を遂げたポショワールの技法を用いて幻想的な世界を描き続けたイラストレーターである。本書は、その作風の根底に、世紀末のイギリスにおいて流行した美意識が根付いていたことを示す貴重な一冊といえる。

### 菅野 ももこ

文化学園服飾博物館 学芸員  
杉野服飾大学ファッション文化論コース卒業。

東京家政大学大学院家政学研究科修士課程修了。  
東京家政大学博物館勤務を経て2020年より現職。  
修士(家政学)。

#### 【専門分野】

西洋服装史

#### 【論文】

菅野ももこ、三友晶子、能澤慧子「マリアノ・フォルチュニイ作「デルフォス」のプリーツ制作技法の解明」『服飾学研究(論文編)』Vol.4, No.1 2021年

菅野ももこ「デュ・モーリアのカリカチュアと美学的ドレスの背景としての唯美主義運動:雑誌『パンチ』を中心に」『服飾学研究(論文編)』Vol.13, No.1 2012年



# 貴重書デジタルアーカイブ

文化学園図書館 文化学園大学図書館  
貴重書デジタルアーカイブ  
Digital Archive of Rare Materials

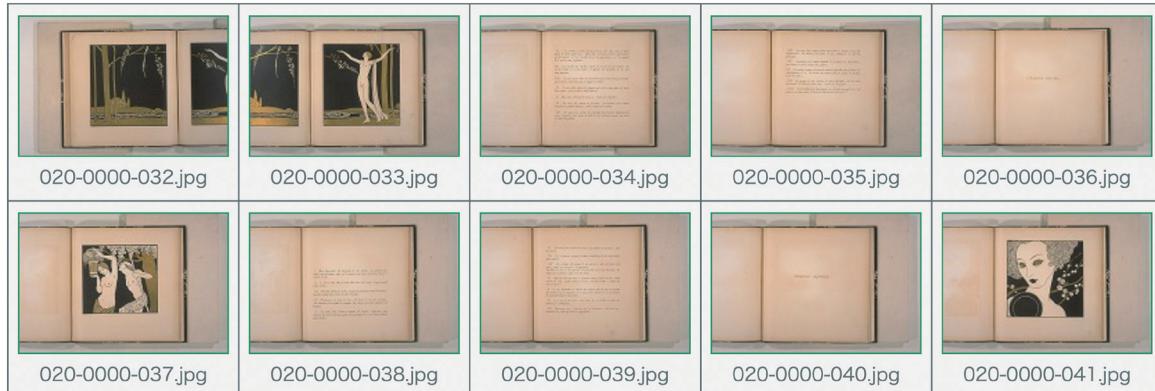
アーカイブについて 利用案内  
—Keyword Search— 検索 詳細検索  
English

Copyright (c) 2009 Bunka Gakuen All Rights Reserved.

文化学園図書館 文化学園

本号でご紹介した稀覯本のうち、『カンティク・デ・カンティクについてのジョルジュ・バルビエによる17のデッサン』は図書館の貴重書デジタルアーカイブ (<https://digital.bunka.ac.jp/kichoshoto/index.php>) から全ページを見ることができます。画面右上の「詳細検索」に進み、プルダウンから「ファイルネーム」を選択し、「020」と入力してください。

なお原本は、文化学園服飾博物館の「ヨーロピアン・モード」展（会期：2022年3月11日～5月18日）にて展示されます。観覧の際、画像と実物との違いを確認してみてください。



不明な点は下記にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください

TEL:03-3299-2395 [URL]<https://lib.bunka.ac.jp>

twitterとfacebookにて図書館の情報を発信しています

[twitter] <https://twitter.com/bunkalib> [facebook] <https://www.facebook.com/lib.bunka>